

子どもの自己決定欲求と自己決定権意識の発達

筑波大学心理学系 新井邦二郎

筑波大学大学院（博）心理学研究科

澤田 匡人・楯 誠・市原 学・櫻井 良子

Development of a child's desire to self-determination and consciousness of the right for self-determination

Kunijiro Arai, Masato Sawada, Makoto Tate, Manabu Ichihara and Yoshiko Sakurai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

In order to clarify the developmental relation between the desire for self-determination and consciousness of the right to self-determination in children, elementary-school students (fifth grade), junior-high-school students (second grade) and high-school students (second grade) were administered questionnaires. The questionnaires contained items covering 14 self-determination behaviors. The main finding is that the level of desire for self-determination was higher than the level of consciousness of the right to self-determination. This suggests that the desire for self-determination develops earlier in children than consciousness of the right to self-determination.

Key words: desire to self-determination, consciousness of the right for self-determination, child

最近の子どもは、自己決定を求めるようになってきたと言われている。しかし、子どもの自己決定には、いくつかの側面が存在すると考えられる。本研究は、子どもの自己決定について、自己決定欲求と自己決定権意識とに分けて、その発達を見てみる。

子どもたちが家庭で生活していくなかで行うさまざまな行動や将来において行うであろう行動の選択を自分で行いたいという欲求をもつ。いわゆる、「自分のことは自分で決定したい。ほかの人に決められたくないという欲求」である。これを、自己決定欲求と呼ぶ。他方、自分のことは自分自身で決めてよい（もしくは決めるべきだ）と考える意識も持つようになる。これを、自己決定権意識と呼ぶ。

自己決定欲求と自己決定権意識とは、次元がやや異なると考えられる。なぜなら、自己決定欲求は、自由や独立の欲求を基礎にして、自分のことは自分で決定したいという個人内の願望や欲求を意味するのに対し、自己決定権意識は、「個人としての欲求」

を越えて、自分のことは大人（家の人）が決めるのではなく自分で決めてよい（決めるべきだ）という社会的意識（認識）を意味するからである。

自己決定欲求と自己決定権意識との間に、このような違いを想定するならば、子どもの発達のうえでは、まず自己決定欲求が芽生え、その後、家庭や学校その他での社会的な経験を経るなかで、自己決定権意識が成長していくものと予想される。発達の的に見て、自己決定欲求が自己決定権意識よりも、先行するであろう。

本研究は、最近の子どもは自己決定を求めるようになったと言われるが、自己決定欲求と自己決定権意識を区別し、それらの発達の関係を調査することを目的とする。

方 法

質問紙調査法を用いた。

被調査者

- (1) 小学校5年生 341名 (首都圏3小学校)
- (2) 中学校2年生 473名 (首都圏3中学校)
- (3) 高校 2年生 457名 (首都圏2高校)

なお、質問内容によって欠損値の数が異なるので、質問内容ごとに有効人数が多少変動している。

調査内容及び調査行動項目

A. 調査内容

- (1) 子どもの「自己決定欲求 (「自分で判断して決めたい. おとな (家の人) に決められたくない」)」について
- (2) 子どもの「自己決定権意識 (「自分自身が決めてよいことであって, おとな (家の人) が決めてよいことではない」)」について

B. 調査行動 (自己決定行動)

以下の14の自己決定行動の「欲求」と「権利意識」について調査を行った。

- (1) どのような内容のテレビやビデオを観るか
- (2) 登校する日の朝, 起床するかどうか
- (3) 夜, 何時に寝るか
- (4) ふだん, どのような服を着るか
- (5) どのような髪形にするか
- (6) 登校するかしないか
- (7) 宿題を含めて勉強するかしないか
- (8) こづかいやお年玉をどのように使うか
- (9) どのような友だちと遊んだり仲良くしたりするか
- (10) 学校でどのようなクラブ活動や部活動をするのか
- (11) 習い事や塾に行くかどうか
- (12) 将来, 高校や大学に行くかどうか
- (13) 将来, どのような職業につくか
- (14) 将来, 結婚するかどうか, またどのような人と結婚するか

C. 回答方法

「すごくそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「ほとんどそう思わない」の4件法で回答を求めた。なお、それぞれの回答を4, 3, 2, 1点にスコアリングした。それゆえ、得点が高いほど、「自己決定欲求」ならびに「自己決定権意識」が高くなる。

結 果

以上の質問紙調査によって得られた結果を、以下に整理して述べていく。

1. 子どもの「自己決定欲求」の調査結果

(1) 主成分分析とI-T相関値・ α 係数

子どもの「自己決定欲求」質問紙の因子構造を明らかにするために、主成分分析を行った。Table 1は、14の質問項目のすべてが0.50以上の因子負荷量を示しており、子どもの「自己決定欲求」質問紙が1因子構造であると考えられる。

また、各項目のI-T相関値は、0.33~0.55に分布し、一定の高さの値が得られた。

さらに全項目の α 係数は、0.83であり、高い内的一貫性を示す数値が得られた。

(2) 平均値とSD

14の質問項目の平均値とSDをTable 2が示している。平均値3.0を越える項目が12項目見られ、全体的に得点が高い。それゆえ、これらの項目自体の判別力は小さいと考えられる。

(3) 学年差と性差

小学校5年, 中学2年, 高校2年の男女の各項目の平均値とSDをTable 3が示している。項目1, 8や9, 10及び13, 14については、小学校5年生で男女とも3.0を越えた高い値を示している。項目1の「どのようなテレビやビデオを見るのか」や項目8の「こづかいやお年玉をどのように使うのか」、また項目9の「どのような友だちと遊んだり仲よくしたりするか」、項目10の「学校でどのようなクラブ活動や部活動をするのか」、さらに項目13の「将来の職業」や項目14の「将来の結婚」については、小学校5年生においても、自分 (子ども) 自身で自己決定したいという欲求をすでにかなり持っていることがわかる。

他の項目については3.0よりも低い数値になっている。そのなかで、項目2の「学校に行く日, 朝起きるかどうか」と項目6の「登校するかしないか」の自己決定は、小学校5年生で男子よりも女子の得点の低いことが目につく。統計的有意差は得られていないが、小学生においては社会的ルールに男子よりも女子のほうが順応的であることを反映した結果と思われる。しかし、中学生や高校生になると、項目2と6の得点は、これも有意差にまで至っていないが、女子の得点が男子よりも少し上回り、自己決定欲求として女子が男子よりも強くもつ可能性を示唆している。

Fig. 1は、14項目の総点の学年と性差をグラフに示した。学年と性の2要因の分散分析の結果、学年間 [$F(2, 1061) = 185.62, p < .001$], 男女間 [$F(1, 1061) = 0.00, p > .05$], 交互作用 [$F(2, 1061) = 7.86, p < .001$] であり、学年の主効果と交互作用が有意であった。学年の主効果について

Table 1 子どもの「自己決定欲求」尺度14項目に関する主成分分析（因子パターン）

項目	F1	h ²
03	72	52
05	70	50
04	68	46
07	68	46
10	66	43
08	65	43
09	64	41
14	63	40
01	63	40
12	63	39
13	59	35
11	59	35
06	57	32
02	50	25

因子寄与 5.66

（因子負荷量と共通性については小数点省略）

Table 2 子どもの「自己決定欲求」尺度14項目の平均値

項目	平均値	SD
01	3.50	0.76
02	2.46	1.06
03	3.34	0.88
04	3.50	0.84
05	3.45	0.89
06	2.57	1.18
07	3.18	0.97
08	3.48	0.82
09	3.72	0.63
10	3.68	0.67
11	3.30	0.93
12	3.25	0.94
13	3.59	0.69
14	3.67	0.67

Table 3 子どもの「自己決定欲求」尺度14項目の学年差・性差

（ ）はSD

項目	小学5年		中学2年		高校2年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
01	3.02 (0.96)	3.00 (0.88)	3.46 (0.79)	3.64 (0.60)	3.69 (0.59)	3.75 (0.54)
02	2.20 (1.11)	1.92 (0.95)	2.50 (1.10)	2.47 (1.06)	2.62 (0.98)	2.69 (1.02)
03	2.73 (1.05)	2.55 (0.94)	3.37 (0.86)	3.40 (0.81)	3.65 (0.64)	3.72 (0.51)
04	2.84 (1.15)	2.82 (1.09)	3.57 (0.71)	3.57 (0.76)	3.73 (0.55)	3.86 (0.41)
05	2.73 (1.19)	2.98 (1.08)	3.35 (0.92)	3.52 (0.81)	3.76 (0.52)	3.85 (0.41)
06	2.02 (1.21)	1.73 (1.05)	2.44 (1.22)	2.58 (1.10)	2.92 (1.05)	3.09 (0.97)
07	2.70 (1.15)	2.31 (1.09)	3.29 (0.91)	3.13 (0.94)	3.42 (0.78)	3.54 (0.64)
08	3.18 (0.98)	2.76 (1.08)	3.53 (0.80)	3.42 (0.77)	3.71 (0.54)	3.77 (0.52)
09	3.54 (0.82)	3.32 (0.92)	3.68 (0.66)	3.77 (0.52)	3.82 (0.48)	3.88 (0.38)
10	3.54 (0.88)	3.18 (1.05)	3.66 (0.67)	3.69 (0.60)	3.82 (0.46)	3.87 (0.34)
11	3.06 (1.15)	2.81 (1.09)	3.23 (0.98)	3.32 (0.86)	3.42 (0.77)	3.62 (0.67)
12	2.98 (1.10)	2.66 (1.14)	3.21 (0.98)	3.20 (0.88)	3.46 (0.73)	3.51 (0.77)
13	3.49 (0.80)	3.17 (0.91)	3.62 (0.67)	3.63 (0.63)	3.68 (0.57)	3.72 (0.58)
14	3.33 (0.96)	3.16 (0.94)	3.70 (0.59)	3.71 (0.61)	3.81 (0.49)	3.87 (0.41)

では Tukey (HSD) 法により 5%水準で多重比較をした結果、各学年で有意差が見られ、小学校5年<中学2年<高校2年という結果が見い出された。なお、交互作用については小学校5年では女子の得点が男子よりも低い傾向が見られるが(平均値とSD; 男子41.30 (7.82), 女子38.35 (9.13)), 中学2年(平均値とSD; 男子46.74 (6.80), 女子47.22 (6.32))及び高校2年(平均値とSD; 男子49.60 (5.12), 女子50.74 (4.69))においては女子の得点が男子よりも高い傾向が見られることによると考えられる。自己決定欲求において、児童期と青年期の男女間で、逆転現象が見られている。

2. 子どもの「自己決定権意識」の調査結果

(1) 主成分分析とI-T相関値・ α 係数

子どもの「自己決定権意識」質問紙の因子構造を明らかにするために、主成分分析を行った。Table 4は、14の質問項目のすべてが0.50以上の因子負荷量を示しており、子どもの「自己決定権意識」質問紙が1因子構造であると考えられる。

また、各項目のI-T相関値は、0.44~0.65に分布し、一定の高さの値が得られた。

さらに全項目の α 係数は、0.87であり、高い内的一貫性を示す数値が得られた。

(2) 平均値とSD

14の質問項目の平均値とSDをTable 5が示してい

る。平均値3.6を越える項目が3項目(No. 9, 10, 14)が見られている。また、それらを含め、平均値3.0を越える項目が12項目見られ、全体的に得点が高い。それゆえ、項目自体の判別力は小さいと考えられる。

(3) 学年差と性差

小学校5年、中学2年、高校2年の男女の各項目の平均値とSDをTable 6が示している。項目9, 10や13, 14については、小学校5年生で男女とも3.0を越えた高い値を示しているが、他の項目については3.0よりも低い数値になっている。そのなかで、項目6の「登校するかしないか」の自己決定は、小学校5年生では男女とも1.5前後という低い数値になっていて、小学生においては登校するかどうかは子どもが決めてよいものではなく、大人(家の人)が決めるべきという意識がかなり強いことを示している。同様のことは、項目2の「学校に行く日の朝、起きるか起きないか」の自己決定にも見られ、他の項目の自己決定と比べ、小学校、中学、高校においても高い数値に至っていない。

Fig. 2は、14項目の総点の学年と性差をグラフに示した。学年と性の2要因の分散分析の結果、学年間 [$F(2, 1067) = 201.06, p < .001$], 男女間 [$F(1, 1067) = 0.84, p > .05$], 交互作用 [$F(2, 1067) = 6.80, p < .05$] であり、学年の主効果と交互作用が有意であった。学年の主効果について

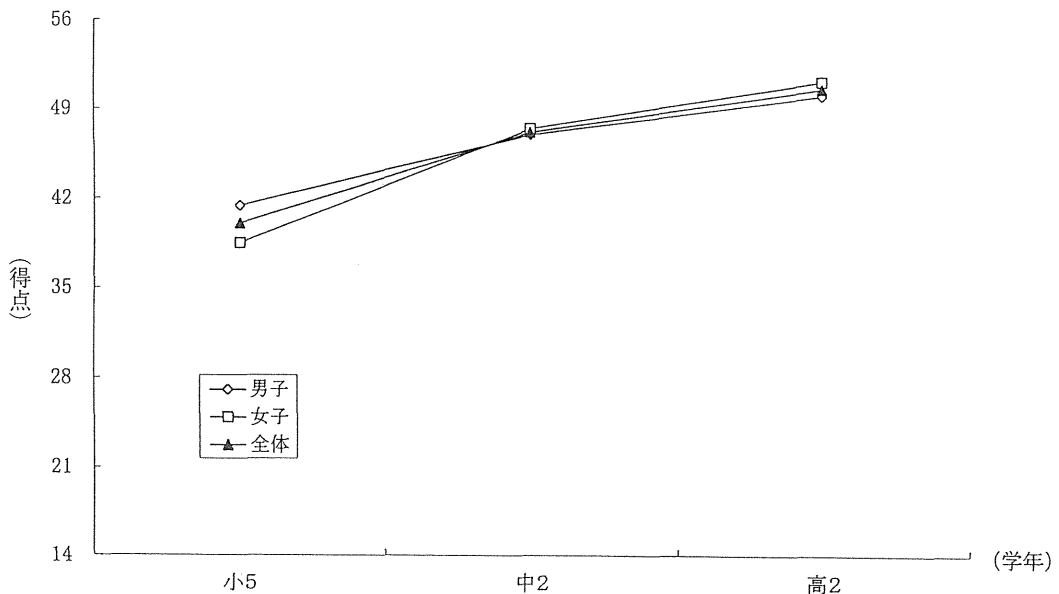


Fig. 1 児童・生徒の「自己決定欲求」の学年差・性差

Table 4 子どもの「自己決定権」意識尺度14項目に関する主成分分析（因子パターン）

項目	F1	h ²
03	73	53
05	68	46
07	66	44
08	65	42
04	65	42
10	60	36
14	59	35
13	59	35
09	59	34
12	59	34
11	58	34
01	58	33
06	56	32
02	52	27

因子寄与 5.29

（因子負荷量と共通性については小数点省略）

Table 5 子どもの「自己決定権」意識尺度14項目の平均値

項目	平均値	SD
01	3.25	0.83
02	2.37	1.05
03	3.10	0.98
04	3.46	0.85
05	3.42	0.89
06	2.32	1.16
07	3.03	1.01
08	3.32	0.92
09	3.69	0.65
10	3.66	0.71
11	3.12	1.02
12	3.11	1.00
13	3.55	0.75
14	3.61	0.74

Table 6 子どもの「自己決定権」意識尺度14項目の学年差・性差

（ ）はSD

項目	小学5年		中学2年		高校2年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
01	2.78 (0.95)	2.58 (0.80)	3.27 (0.84)	3.29 (0.72)	3.52 (0.71)	3.53 (0.65)
02	2.11 (1.06)	1.83 (0.89)	2.42 (1.10)	2.39 (1.06)	2.52 (0.99)	2.60 (0.99)
03	2.22 (1.11)	2.13 (0.98)	3.16 (0.93)	3.20 (0.80)	3.47 (0.72)	3.53 (0.68)
04	2.74 (1.17)	2.81 (1.08)	3.61 (0.70)	3.52 (0.74)	3.68 (0.59)	3.77 (0.49)
05	2.82 (1.23)	2.87 (1.04)	3.33 (0.89)	3.54 (0.78)	3.71 (0.59)	3.74 (0.53)
06	1.66 (1.04)	1.38 (0.71)	2.26 (1.18)	2.40 (1.12)	2.64 (1.08)	2.84 (1.02)
07	2.56 (1.21)	2.38 (1.10)	3.13 (0.99)	2.95 (0.98)	3.25 (0.82)	3.33 (0.81)
08	2.96 (1.06)	2.50 (1.04)	3.45 (0.91)	3.23 (0.91)	3.59 (0.64)	3.64 (0.66)
09	3.43 (0.97)	3.35 (0.87)	3.70 (0.61)	3.73 (0.58)	3.79 (0.47)	3.86 (0.40)
10	3.47 (0.94)	3.18 (1.04)	3.66 (0.70)	3.67 (0.61)	3.79 (0.53)	3.85 (0.42)
11	2.73 (1.25)	2.56 (1.16)	3.16 (1.05)	3.19 (0.94)	3.27 (0.84)	3.42 (0.80)
12	2.83 (1.15)	2.45 (1.14)	3.15 (1.01)	3.05 (1.00)	3.32 (0.82)	3.33 (0.84)
13	3.48 (0.88)	3.05 (1.01)	3.60 (0.73)	3.58 (0.68)	3.63 (0.63)	3.68 (0.61)
14	3.24 (1.04)	3.12 (1.03)	3.70 (0.61)	3.64 (0.66)	3.77 (0.51)	3.76 (0.54)

は Tukey (HSD) 法により 5% 水準で多重比較をした結果、各学年で有意差が見られ、小学校 5 年 < 中学 2 年 < 高校 2 年 という結果が見い出された。なお、交互作用については小学校 5 年では女子の得点が男子よりも低い傾向が見られるが (平均値と SD; 男子 39.12 (7.44), 女子 36.09 (7.39)), 高校 2 年においては女子の得点が男子よりも高い傾向が見られる (平均値と SD; 男子 47.95 (5.28), 女子 48.88 (5.43)) ことによると考えられる。このように自己決定権意識においても、児童期と青年期において男女間での逆転現象が見られている。

3. 自己決定欲求と自己決定権意識との比較と相関

子どもの自己決定の発達においては、まず独立への欲求としての自己決定欲求が年齢的には早めに現れ、その後、社会的意識の形成過程を経て自己決定権意識が作られていくと考えられる。この検討が、ここでの課題である。

Table 7は、小学 5 年生の子どもの「自己決定欲求」と「自己決定権意識」の各項目の平均値の比較である。すべての項目において、自己決定欲求の得点が自己決定権意識の得点よりも上回っていることが分かる。このうち、項目 1 の「テレビとビデオ」、項目 3 の「夜の就寝」、項目 6 の「登校」、項目 8 の「こづかいやお年玉の使い方」と項目 11 の「習い事

や塾」の 5 項目に有意差が見られている。

Table 8は、中学 2 年生の子どもの「自己決定欲求」と「自己決定権意識」の各項目の平均値の比較である。中学 2 年生においても、14 項目中 13 項目において自己決定欲求の得点が自己決定権意識の得点よりも上回っていることが分かる。このうち、項目 1 の「テレビとビデオ」、項目 3 の「夜の就寝」、項目 6 の「登校」、項目 7 の「宿題を含めた家での勉強」と項目 8 の「こづかいやお年玉の使い方」の 5 項目に有意差が見られている。

Table 9は、高校 2 年生の子どもの「自己決定欲求」と「自己決定権意識」の各項目の平均値の比較である。高校 2 年生においても、14 項目すべてにおいて自己決定欲求の得点が自己決定権意識の得点よりも上回っていることが分かる。このうち、項目 1 の「テレビとビデオ」、項目 3 の「夜の就寝」、項目 5 の「髪形」、項目 6 の「登校」、項目 7 の「宿題を含めた家での勉強」、項目 8 の「こづかいやお年玉の使い方」、項目 11 の「習いごとや塾」、項目 12 の「将来の進学」と項目 14 の「将来の結婚」の 9 項目に有意差が見られている。

以上の結果から、小学生から高校生まで、自己決定欲求が自己決定権意識よりも高いことが分かった。したがって、自己決定欲求が自己決定権意識よりも先行して発達していくことが確認できた。

Table 10は、自己決定欲求と自己決定権意識の相

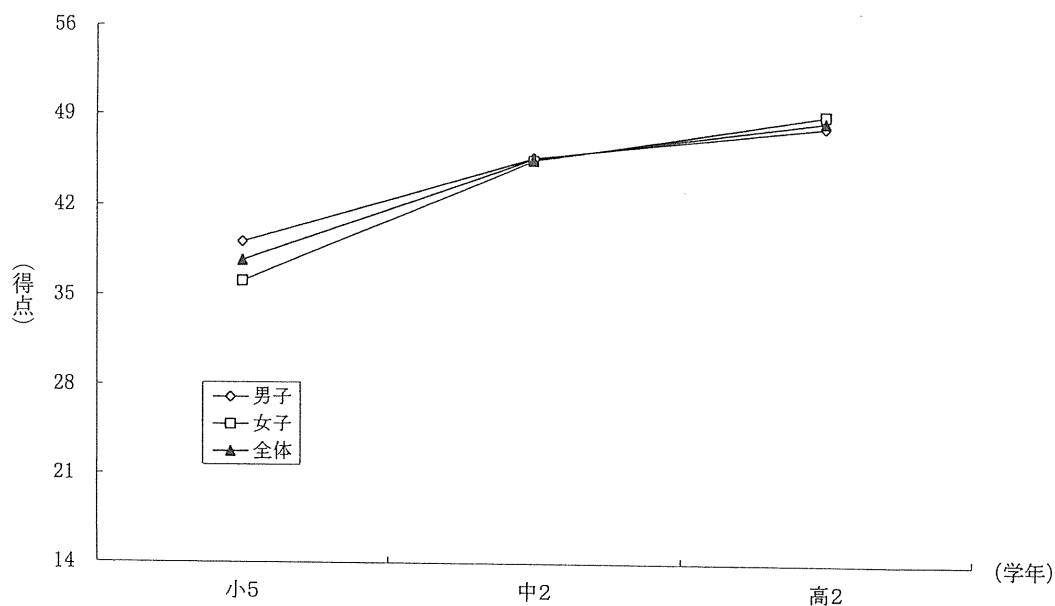


Fig. 2 児童・生徒の「自己決定権」意識の学年差・性差

関を示している。

小学5年生、中学2年生および高校2年生において、これらの間には、強い正の相関が見られることが分かる。項目別に見ると、項目2の「朝の起床」や項目6の「登校」は、小学5年生のときよりも中学2年生や高校2年生において高い相関値が示されている。自己決定権意識と自己決定欲求がいっそう

一体的になっていく様子を示しているのかもしれない。これらの項目とは対照的に、項目14の「将来の結婚」の相関値は年齢が上がると低くなっている。この項目は、Table 7, 8, 9が示しているように、年齢が上がると、自己決定権意識はそれなりに高くなっていくが、それに比べて自己決定欲求はもっと高くなっていく。容易に想像がつくように結婚する

Table 7 小学5年における子どもの「自己決定権」意識と「自己決定欲求」の得点 (SD)

項目	自己決定権	自己決定欲求	t 検定
01	2.69 (0.88)	3.01 (0.94)	-3.74**
02	1.96 (0.99)	2.03 (1.04)	-0.73
03	2.18 (1.04)	2.63 (1.02)	-4.64**
04	2.77 (1.13)	2.84 (1.12)	-0.66
05	2.84 (1.14)	2.85 (1.14)	-0.09
06	1.54 (0.91)	1.89 (1.14)	-3.61**
07	2.47 (1.16)	2.52 (1.13)	-0.46
08	2.71 (1.07)	2.96 (1.04)	-2.52**
09	3.39 (0.93)	3.43 (0.89)	-0.47
10	3.35 (0.99)	3.39 (0.97)	-0.43
11	2.64 (1.20)	2.93 (1.12)	-2.66**
12	2.68 (1.15)	2.85 (1.13)	-1.59
13	3.30 (0.95)	3.33 (0.87)	-0.35
14	3.19 (1.04)	3.27 (0.92)	-0.87
計	37.73 (7.82)	39.92 (8.61)	-2.83**

**p<.01

Table 9 高校2年における子どもの「自己決定権」意識と「自己決定欲求」の得点 (SD)

項目	自己決定権	自己決定欲求	t 検定
01	3.53 (0.68)	3.72 (0.57)	-4.39**
02	2.56 (0.99)	2.66 (1.00)	-1.46
03	3.50 (0.70)	3.68 (0.58)	-4.06**
04	3.73 (0.55)	3.79 (0.49)	-1.67
05	3.73 (0.56)	3.81 (0.47)	-2.25*
06	2.73 (1.06)	3.01 (1.01)	-3.92**
07	3.29 (0.82)	3.48 (0.72)	-3.57**
08	3.61 (0.65)	3.74 (0.53)	-3.18**
09	3.83 (0.43)	3.86 (0.43)	-1.01
10	3.82 (0.48)	3.85 (0.40)	-0.99
11	3.34 (0.82)	3.52 (0.73)	-3.36**
12	3.32 (0.83)	3.49 (0.75)	-3.12**
13	3.66 (0.61)	3.70 (0.57)	-0.98
14	3.78 (0.50)	3.85 (0.43)	-2.18*
計	48.43 (5.34)	50.15 (4.95)	-4.85**

*p<.05, **p<.01

Table 8 中学2年における子どもの「自己決定権」意識と「自己決定欲求」の得点 (SD)

項目	自己決定権	自己決定欲求	t 検定
01	3.27 (0.79)	3.56 (0.70)	-5.58**
02	2.40 (1.08)	2.48 (1.08)	-1.06
03	3.20 (0.87)	3.39 (0.83)	-3.21**
04	3.58 (0.72)	3.58 (0.72)	0.00
05	3.43 (0.84)	3.44 (0.87)	-0.17
06	2.32 (1.16)	2.51 (1.17)	-2.34*
07	3.08 (0.98)	3.24 (0.91)	-2.43*
08	3.37 (0.90)	3.49 (0.78)	-2.05*
09	3.71 (0.61)	3.73 (0.60)	-0.47
10	3.67 (0.65)	3.68 (0.63)	-0.22
11	3.18 (1.00)	3.28 (0.93)	-1.49
12	3.25 (0.67)	3.24 (0.92)	-0.87
13	3.14 (0.75)	3.62 (0.65)	-0.70
14	3.32 (0.72)	3.71 (0.60)	-0.69
計	45.59 (6.94)	46.96 (6.62)	-2.90**

*p<.05, **p<.01

Table 10 子どもの「自己決定権」意識と「自己決定欲求」との相関

項目	小5	中2	高2	計
01	0.59***	0.58***	0.50***	0.62***
02	0.43***	0.73***	0.70***	0.67***
03	0.58***	0.64***	0.58***	0.69***
04	0.69***	0.73***	0.52***	0.73***
05	0.74***	0.75***	0.58***	0.76***
06	0.50***	0.76***	0.74***	0.30***
07	0.62***	0.70***	0.67***	0.70***
08	0.65***	0.77***	0.58***	0.72***
09	0.71***	0.72***	0.70***	0.73***
10	0.82***	0.73***	0.68***	0.78***
11	0.67***	0.77***	0.68***	0.73***
12	0.65***	0.71***	0.59***	0.68***
13	0.74***	0.72***	0.68***	0.73***
14	0.76***	0.68***	0.36***	0.72***
計	0.87***	0.89***	0.78***	0.89***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

ことやその相手を自分で決める権利があるという意識の形成は、他の項目の内容の自己決定権意識よりも遅くなって形成されていくのかも知れない。

考 察

1. 自己決定欲求が自己決定権意識より先行して発達すること

小学生、中学生、高校生のいずれにおいても、自己決定欲求が自己決定権意識よりも、高い得点を示す結果が得られた。このことは、子どものなかで自己決定欲求が自己決定権意識よりも早期に、しかも先行して発達するというを示している。また、自己決定欲求と自己決定権意識とが、小学生、中学生、高校生のいずれにおいても高い相関を見せたが、このことから自己決定権意識が、自己決定欲求の発達とほぼ足並みをそろえて発達していくことが示唆された。

自己決定欲求は、自由や独立を求める人間としての基本的欲求に根ざしているものと思われる。したがって、これは時代や文化を超えて人々が持つものと考えられる。

他方、自己決定権意識は、「社会的形成物」である。その子どもの育つ社会が「子どもは親の意見に従って行動すればよい」と考えるのか、それとも「子どもといえども、自分に関わるものは自分自身で決めてよいし、決めるべきだ」と考えるのかによって、自己決定権意識の作られ方が異なるだろう。すなわち、前者のような子どもの自己決定を認めない社会では、子どもは自己決定欲求を持っていても、自己決定権意識は低いままに育つと考えられる。他方、後者のような子どもの自己決定を認める社会では、自己決定欲求の発達に歩調を合わせて、自己決定権意識も発達していくと考えられる。本研究の結果は、後者のケースのような発達の結果を示した。

2. 自己決定欲求と自己決定権意識が小学生では男子で高いが、中学もしくは高校生では女子で高くなること

児童期と思春期とにおいて、男子と女子のあいだに逆転現象が示された。一方、子どもの自己決定行動の発達の調査（新井，1996，1997）においては、小学生のときから、中学生、高校生に至っても女子が男子よりも高い自己決定行動を示している。これらの結果を合わせて考えてみたい。

このように、小学生において実際の自己決定行動面では女子が男子よりも高いが、欲求や権利意識の面では男子が女子よりも高くなっている。このことは、小学生の男子では、自己決定欲求や自己決定権意識は高いが、家人の「被保護・被干渉度」が高く、実際の自己決定行動は低くなると推測される。その点、小学生の女子は親の保護や干渉を受けることが男子よりも少なく、のびのびと自己決定を経験している。こうした経験の差が、中学生や高校生になったときに影響を与え、実際の自己決定行動だけでなく、欲求や権利意識面でも女子が男子よりも高くなるという結果を招来していると推測される。

要 約

子どもの自己決定欲求と自己決定権意識の発達を明らかにするために、質問紙調査を小学生（5年）、中学生（2年）、高校生（2年）の計1200名の生徒に実施した。それぞれの質問紙は、家庭における子どもの14個の同じ自己決定行動についての「欲求」と「権利意識」の項目から構成された。

主な結果として、すべての学年において自己決定欲求水準が自己決定権意識水準よりも高いことがわかった。この結果は、自己決定欲求が自己決定権意識よりも早期に、しかも先行して発達することを示していよう。

引用文献

- 新井邦二郎 1996 小学生の自己決定経験の調査 筑波大学心理学研究 18, 75-95.
 新井邦二郎 1997 中学・高校生の自己決定経験の調査 筑波大学心理学研究 19, 7-19.

(受稿9月24日：受理11月13日)